



滑
葉
雜
決

寅
上

特 別
~ 5
6326
1



叙

夫詭諧の道は早振神代のむし思慮の智海と神
 うり婦は是よりして天照の神の御國とて成ぬ
 然あはれ此女を生れし人誰は道と仰ぐはは後宮を
 素戔雄よりとりて連ぶる白女衣尊の御より始りて
 此二道のなるとあると雲のく人歌の始りては
 詭諧はふらりていひたはるるやうな事あると
 道は得ありしと又得しと文才得見の志子と詭意を
 解せしむる句と口はすまふあはれは犬の童鳥あはれ
 と解する時滑稽の庭は走り道は説其解し得る事
 だれは後世の事ありて又傳變の媒とあるは是は道の
 ぶらりたるの謂あり歎きしてと餘あり奈はふらりけ

道は執りてわつゝの書籍を管見とす。誰かの使ふ事、或
 向ふおりの只記憶の愚あふゆせとて是を紙に憶せり其
 草稿の教先せん事と思ひて一書とあり、ゆがの石のくくみ
 碑と彫刻ハ點畫ヲ積うして文字對と對ハ字と解説とを
 事あてし今、余は書と事とを思ひて只博識の君子、或
 まるゝ古史経傳の首を同いぬ、ゆがんと欲とる、面はかの君子
 の、あゝ滑枕者雜談と名つゝまゝとす。

洛東林麻

正徳二年癸丑載八月十三日 四時堂其詠

滑枕雜談卷之一目錄

春 正月部上

- 初 春 異名 日 立春節
- 日 侏鸞と戴 侏花 去懐と節
- 五 正月 異名 日 霞
- 日 東風 去風 日 水溫
- 九 雪解 雪汁 日 氷解 凍解
- 日 録をさして 凍るる
- 日 去さして 去まけて
- 十四 元日 三の節 三の節 日 星佛
- 日 毘沙門天切徳經
- 十六 鏡餅 為餅 日 御薬を借と
- 日 椒柏酒 椒盤 日 朝賀 小初拜
- 日 東風解氷 蟄虫始振 日 霞灰と雁と
- 三 雨水節 椒茶奠 鴻雁來
- 七 伏保姫 日 山笑
- 日 暄 長閑 廉 淑氣
- 日 残雪 春雪 日 春雨おきり
- 十一 去疾 日 去月 御月
- 十二 あらむ此年 新年 去るる
- 十五 四方拜
- 日 水包井田 去 為夷
- 日 懸想文 去 齒固
- 十九 屠蘇教 神の白教 夜達教
- 元日宴會 外任美 諸司美
- 七 聖御曆 氷様

暖赤奏 四栖奏
 院拜礼 七下 擔茶座 日 八風占
 日 桃符 桃板 仙木 日 元方 茶注 元九 日 松 はし進飾 かきり炭 炭乃木
 日 後菓 橘 柿 日 懸鯛 かきり梅花 日 大眼
 日 蓬芽 橙 盤 後儀 橘 栗 昆布 香椿 野老 串枝 梅 柀子 七下 雜煮
 日 又辛盤 日 鏡草 芋 いもかりり 日 押鮎 こまめ
 日 莖數の子 日 田牛座 ひきさた豆 日 七下 儀海氣
 日 辛燗肴 日 古箸 日 畫雜
 日 年玉 日 毬打 胡鬼の子 柀子板 日 演弓 演矢
 日 初曆 日 古書始 日 浴衣始 日 年男
 日 祇園巡掛 日 朝觀行幸四三 日 二宮大食 日 古家大食
 日 除時宴 日 揚家徳礼 日 雨巾取古松離子
 日 天狗酒盛 日 庭竈 日 菰ひき日 店卸
 日 舟系始 舟玉系 日 子系始 ひめくし
 日 湯殿始 日 水祝 日 兎 日 後杖 日 神芝居

辛 御祝初 日 裏白進款 日 院御嘉始 親方後始 牛御方後始 御方後始
 日 二物連款 日 桃詣 日 院御嘉始 親方後始 牛御方後始 御方後始
 小松引 藝屋掃 日 初寅詣 番部 帳紙 女書書表
 日 卯杖卯楯 日 叙位 日 御新始 日 御披露始
 日 万葉万葉 並 括部 日 后系系 大御事
 日 春の文



滑稽雜談卷之第一

四季之辭

春之部

○春

出也者物之出也○前漢律曆志曰春為陽萬物始生也

○又曰春蠢也物蠢生乃運動日行東陸謂之春○公羊

傳曰春者歲之始也注春者開闢之端養生之首○松則

解曰春者歲之始也注春者開闢之端養生之首○松則

車務之陽和以之而實之也○名暉之也○暉之也○暉之也

あまのつとむのつとむ

△春王

○律曆志曰春三月每月書王元之三統也

三統合於一元○董仲舒傳曰春秋謂春為王

異名類青陽○爾雅曰春曰青陽郭璞云氣青温陽

蒼帝○史記索隱曰文耀鉤云東宮蒼帝其精為龍是星

青春 ○梁氏纂要曰春時曰芳春青春陽春九春春辰曰
良辰嘉辰芳辰春景曰媚景和景韶景春節曰華節芳節
嘉節韶節淑節 獻節 ○唐太宗詞曰條風開獻節仄律
動初陽 青帝 賦 歲始傳 羊 敦和素

○立春

素問六節藏象論曰玄臺注曰按月
令呂氏春秋大明一統曆而注七十二候立春節三候云
初五日東風解冰次五日蟄蟲始振後五日魚上冰
僻抄云立春の初五日今の立春の初五日と讀み早まは必ま立日とす
以呂氏の初五日と讀み立春の初五日とす ○初五日立春の初五日とす
の節之立春の後十五日柳始生也とす初五日立春の初五日とす
と年曰立春又除日立春の初五日とす ○當年の立春の初五日とす
正月の初五日の中の一の日は立春の初五日とす ○立春の初五日とす
夫と中に形は初五日とす ○初五日とす ○初五日とす ○初五日とす

△東風解冰

○禮記月令曰孟春之月東風解

冰 ○初五日立春の初五日とす ○初五日とす ○初五日とす
七十二候とす是立春の節の初五日也東風解冰詩秋は初五日とす
初五日とす ○初五日とす ○初五日とす ○初五日とす ○初五日とす
合衆のては初五日とす ○初五日とす ○初五日とす ○初五日とす

△蟄蟲始振

○月令曰孟春之月蟄蟲始振

是立春の初五日とす ○初五日とす ○初五日とす ○初五日とす
初五日とす ○初五日とす ○初五日とす ○初五日とす ○初五日とす
初五日とす ○初五日とす ○初五日とす ○初五日とす ○初五日とす

△魚上冰

○月令曰孟春之月魚上冰

乃氣候之孟春陽の氣は初五日とす ○初五日とす ○初五日とす
初五日とす ○初五日とす ○初五日とす ○初五日とす ○初五日とす

也...
 厚今...
 萬十九 見序 燕來時...
 草木萌動
 樂記注云屈生曰句芒直出曰萌
 萌也
 字彙曰萌音盲草芽
 三月...
 雁下萌...

正月之部

○正月

○論語大全新安陳氏曰不曰一月而

曰正月取王者居正之義
 五雜俎曰以一月為正月自
 唐虞已然舜以正月受終於文祖
 玉燭宝典云正月為
 端月秦避正字諱故曰端月
 始皇名政以同音故避之
 異名 孟春
 禮記月令曰孟春之月 履新
 唐禮樂志曰正旦群臣上千秋百歲壽制曰履新之慶與卿等同
 孟陽
 梁元纂要曰正月為孟陽
 又曰孟春曰孟
 陬上春初春開春發春啟春首春首歲
 陬月
 爾雅曰正月為陬
 寅孟月
 漢初正
 謹月
 春
 秋
 書
 譜
 王
 棋始
 大簇
 前漢律曆志曰簇奏也言陽氣太奏地而
 達物也位於寅在正月
 字彙曰正字本音去聲
 政至秦始皇諱政改為平聲
 儲成音征後世至今沿之
 神

雪同雪の凍雪をト雪汁雪の終る雪雪を去也淡雪の消る雪富士の
雪消る初雪去よ夏私云万葉集卷三不盡乃嶺余寒之置雪者六月乃十五
又消る後河の帆土記はるる時り六月十五日はるる時り○私云雪消るけし雪を去る雪氣消る
万 十 為君山田之澤余寒具採跡雪消之水余裳裙所沾榜本朝臣

○氷解凍解

也徐曰氷解而流也○風俗通曰氷流曰漸氷解曰泮

蕭千巖春詩曰浮漸把断春風路○泮拿曰氷の凍る流る

去あり残る氷為氷氷碎るるあり○風俗通曰氷壯曰凍俗曰天

○殘雪

饒玉塔殘雪在羅幕暗香消○中納言紀長谷雄詩曰庭

増気色暗砂綠林變容輝宿雪紅○貞徳云殘る雪去る雪の石

續拾遺

△春雪

凡欲妬梅將柳故落早春中○韓退之詩曰河南二月末

雪花一尺圍○朱文公謂草木之花皆五出雪花六出地

六生水之義然觀立春後雪皆五出冬屬陰春屬陽想陰

陽奇偶天亦不能違○五雜俎曰余每冬春之交取雪花

視之皆六出其五出者十不能一二也○泮拿曰春の雪去

てて三出也○私曰春の雪のふと上流の雪は統も春の雪は

○春雨

流沛然而施無地不注無物不生○太平御覽曰榆莢雨

春雨也○叔名曰雨水從雲下也雨者輔也言輔時生養

元命包曰陰陽和為雨○貞徳云春の雨は春の雨は

春の雨は春の雨は春の雨は春の雨は春の雨は

春の雨は春の雨は春の雨は春の雨は春の雨は

春の雨は春の雨は春の雨は春の雨は春の雨は

○元日

元日 ○書言故事曰正月朔日謂之元日 ○舜典曰月正

元日舜格于文祖 注蔡沉云月正正月也元日朔日也

朱子曰元大也始也乾元天德之大始故萬物資乾以始

而有氣資坤以生而有形 ○元乃名ありけし日を元とすとの次乎下に表はせり

履端 ○概采褚晉書熊遠議曰履端元日正始之初

首祚 ○王義之月儀書曰日往月來元正首祚

雞日 ○東方朔占書正月一日為雞日 人正 出律曆志

天臘 ○道書云正月朔為天臘 又端 又為地臘 又為七

臘 又為十臘 又為七 又為四 又為四 又為四

臘 又為五 又為十 又為二十 又為三十 又為四

三乃始 ○玉燭宝典曰正月百為三元之

日 歲之元時之元日之始也 ○五雜俎曰又謂之四始正

日 歲之元時之元日之始也 ○五雜俎曰又謂之四始正

日 歲之元時之元日之始也 ○五雜俎曰又謂之四始正

日 歲之元時之元日之始也 ○五雜俎曰又謂之四始正

日 歲之元時之元日之始也 ○五雜俎曰又謂之四始正

日 歲之元時之元日之始也 ○五雜俎曰又謂之四始正

日 歲之元時之元日之始也 ○五雜俎曰又謂之四始正

懸伎橋設之修理職敷筵道設之掃部寮其上鋪布毯內藏寮官立

御屏凡設之納內構御座掃部寮四方置案立燈木工設火舍

造花寮口書主殿寮庭燎立明沙汰之內掌燈女孺務之○

粟賦日四方并調進方修理職掃部寮以道短石三

斗內藏寮官人布出納石木工寮四寮一本一腳燈臺口

書寮仁主殿寮丑南座斗檝女孺內豎御草鞋戶屋主

六預御倉一脂石六預

○朝餉一日當時年中行事記曰朝餉內膳司

御厨子所小預調進之出御於清涼殿供之○粟賦日御

飯干餵十石三斗供之平盛高盛御厨子所預強供御々膳

御厨子所預供之

○星佛星佛工港慶星佛威儀形像記曰

羅睺星 赤色三面六臂每面有三目右一手取鬼二耳

次手持箭次手持月輪左一手執人頭鬚次手持弓次手

持日輪乘水中或雲中現面計 土曜 肉色四臂右一

手持鉢次手執刀左一手垂下押膝次手執三戟及乘馬

水曜 淺黃色具四臂右一手執劍次手持鉞左一手

持蓮華次手持輪 金曜 白色具四臂右一手作刀印

次手持宝珠左一手持捧次手持戟又 日曜 白色右

手取未敷蓮花左手執日輪住雲中乘坐馬又結大日尊

知拳印 火曜 赤色右手執火輪左手持宝瓶乘水牛

計都 赤色具四臂右一手如羅睺取鬼二耳次手持

月輪左一手執人頭鬚次手持日輪乘龍 月曜 白色

右手執蓮花左手作拳安腰住雲中乘坐鴉 木曜 青

色右手執刀左手作拳當胸乘獅子○是

よのありし是とも表し好もたす非表の流りてしるは

○毘沙門功德經

○古卷傳て云世尊元經の宣此何大

非人非表日花門の如くもく毘沙門經の文句と訓讀を唱く秘を義とする
好もは者非表をたるとして唱門作と好も又元日毎の風儀を火風の志と号す
風の字音志久世傳て志由久の志と云風と宿と音おそよ板るす一風
もと元經事ゆいへりて毘沙門經とて訓讀を事申すて傳りし
當世傳ては信するも尤破經の國名と身儀一人申と擧げその切力作す
音おかの經と譯す

○懸想文

○元經より乃い上旬の回大非人牙布衣

と号す頭より白布巾と戴て頭面と覆いけり一と眼よの露りて紙符と
當中よ當る是とけりしと好も男女何のまうに寫すまのの
彩も非人よの正解しりてそのもとほ唱へてその骨と擧げ是とけりしと

と好もその骨と擧げしと好も其の志んて而經のくるしむといふ
あゆみ流産初所をうに載りてその骨と擧げしと好も其の志んて
寫す又又化粧文とて唱へ又懸書とてけりしと好も其の志んて

○齒固

○江家次茅日元日平且天皇御東廂

清涼殿也 自御厨子所 拾芥抄曰以內膳內藏造酒及諸御
御臺二本內膳自右青瑛門供御齒固具盛青瓷每物有
蓋擊子采女傳取之自茅三間御几帳上付女藏人傳陪
膳以高坏六本獻之有餅鏡火地江大根坏苳串刺坏押
鮎一坏切頭者鹽鮎頭一坏切置猪完一坏以鹿完一坏以
上七坏之內精進物供第一御臺魚類供二御臺或說無
腹赤鹿裏書曰上古天子用猪鹿給飲喜式鹿完有
江國鹿完四技猪完四技已上二坏給飲喜式鹿完有
曰天皇御生氣在北之時着御綠色御氣之時其方各有
用異色也 又曰齒謂人年齡也齒固者延年固齡之義

五のりふそしとてまては麻と唱せしるの五説不ぬとてふ所

○御藥と供

始元日平且天皇御東廂着御生気方御陪膳女房以下

○江次第日供御藥弘仁三年中

着座藥子入自鬼間候尚藥座南采女二人御藥女官頭
六人女官候於右青瑣門内御厨子所供御臺二本得選於
鬼間御障子付女藏人女藏人執之來授陪膳内膳自右
青瑣門供御齒固具齒固條次供一獻八層物細切也先煖御
酒主殿寮以御藥入於酒名之屠以盛別器官内輔典藥
頭侍醫等三人一進膝突嘗之依位階皆用別杯次供
御酒盞裏書曰第一女官御酒盞第一女官御酒盞第二女官御酒盞
第三女官御酒盞第四女官御酒盞第四女官御酒盞
次供御料酒居御銚子有蓋其上居此間内膳官人以
大土坏三枚小土器三枚與藥女官女官前分令嘗藥子
本方起次盛御酒盞自御几帳綻付於藥頭藥頭傳陪膳

主上入自夜御殿南戸當塗籠籠東方戸立給陪膳女房取
御酒盞入御通自東廂御障子參御前供之本方向東
各飲之次召後取次上北壁南柱間藏人定後取押於
寸六分元日四位殿上北壁南柱間藏人定後取押於
高戸者近代不必然但元日不差近衛次將其人出自殿
上上戸經簀子敷自第二間入着座次女官移入御酒盞
餘分御銚子餘分等於大土器傳給於後取人其人飲畢
其女官畢次供一獻神明白散也五物搗篩醫書出但御
藥不於弓場殿和合之相副進之次供御銀匙居馬頭盤
入神明白散於金銅小器居中盤尚藥鋤藥入御盞次供
御於一獻御座飲畢後女官以匙三度入白散於大土器次
給餘分於後取初或此間給看於後取多給大根正月
或給女房置扇上出之次供三獻九度搗篩其儀与二獻
同第二日儀如朔第三日三獻供畢次典藥寮供御膏藥
忌名稱上次供御匙盛千瘡膏於金銅小器居中盤供之

△度嶂散

温酒服

○延キ式曰度嶂散辟嶂山惡氣平且以麩方 廣文椒細辛防風桔梗乾薑白木肉桂各五分

△藥子

○江次第曰舊年十一月二十日以前陰陽寮進勘欠二通付藏人所延キ式十日以前一通御忌勘欠御八一通藥子勘欠此年并色見奉御之人求童女未嫁之

者年齡符合藏人仰内藏寮令給裝束料○又曰元朝未節分之時藥子衣用旧年御生氣方色○韵語陽秋曰或

問董勛屠蕪必自幼飲何也曰少者得歲故先老者失歲故后 顧况詩曰手把屠蕪讓少年○東坡詩曰但把究

愁博長健不妨寂後飲屠蕪○此等幼と云々○盧柳南說云正旦飲屠蕪酒必始干早幼是早幼教不遜

月正元旦一歲之始長幼之分不可不正故余家必先長者○此等幼と云々○當時年

中行事記曰屠蕪白散典藥頭供之為供此御藥給家領正二石余

○荆楚歲時記曰元日進椒栢酒椒

是玉衡星精服之令人身輕能走栢是仙藥進酒次第以

年少者為先○時珍本草曰椒栢酒元旦飲之辟一切疫

癘不正之氣除夕以椒三七粒東向側栢葉七枚浸酒一

瓶飲○晋書曰劉臻妻陳戌元日獻椒花頌○庾信詩云

椒花逐頌來 杜甫詩椒盤已頌花梁庾肩云聊傾栢葉酒試奠五辛盤

△椒叙崔寔四民月令曰過臘一日謂之小

歲拜賀君親進椒酒從小起後世率於正月一日以盤進

椒飲酒則撮置酒中号椒盤焉○此等幼と云々

△栢栢と云々○此等幼と云々

○日本紀卷第廿一日神武天皇辛酉

年春正月庚辰朔天皇即位於橿原宮是歲為天皇始

年尊正妃為皇后生皇子神八井命神渟名川耳尊故古

朝賀一日

○日本紀卷第廿一日神武天皇辛酉

年春正月庚辰朔天皇即位於橿原宮是歲為天皇始

年尊正妃為皇后生皇子神八井命神渟名川耳尊故古

五位職事勤之 奉行職事勤之 布毳內藏寮官人勤
 之 庭燎主殿寮調進之 立明同 御前掌燈內豎上
 之 公卿之裾召使直之 ○柳原年中行事裏書曰或記
 云小朝拜事非公事兼日不及催者也執柄以下諸卿參
 節會人々列之臨期管領頭仰六位令構御殿御裝束了
 出御以下令申沙汰也先例必非頭申沙汰節會奉行職
 事相兼事等有之又雖不參節會參列小朝拜事古今之
 例勿論別又註之云 ○貫首秘抄曰內府又被命曰小朝
 拜並院拜禮頭依位次列立人下於閑白家拜禮者不論
 位階列非參キ之上也小朝拜非職上臈不立事依上頭
 上無骨也近來非職強不立也於院拜禮者必位階下臈
 頭列數輩之下イニキ事必可立也先達皆立之云此
 石補大

○元日宴會

月戌寅朔庚辰宴公卿於內裏甲申宴公卿於內裏仍賜
 衣裳續日本記光仁天皇寶龜四年正月丁丑朔宴五
 位已上於內裏賜被 ○江次第曰當日平明令主殿寮
 掃除南庭南殿北廂立御障子御帳懸帷仰左右衛門府
 從長樂永安兩門令敷砂撤去東西火炬屋次上南殿格
 子掃部洒掃殿上凡節會日雖御近衛引陣王御著外辨
 所候殿乾角壇上凡節會日雖御近衛引陣王御著外辨
 天皇著御帳中倚子近伏稱警內辨著宣陽殿兀子內侍
 臨東檻內辨謝座再拜開門承明并左右腋門左右兵衛
 禮門內辨召舍人音二大舍人四人同音稱唯內辨宣大夫
 達召少納言稱唯左廻出召之王卿以下列入立標兼入自
 門左扉異內辨宣侍座其後大重行體有說々親王後大臣
 位重行異內辨宣侍座其後大重行體有說々親王後大臣
 下也但二位中納言大納言後大納言其後大臣
 下二位參議中納言下也 群臣再拜謂之謝座堂上內

△冰樣

○日本紀十仁德天皇六十二年是歲額田天中彥皇子獵于園鷄野時皇子自山上望之瞻野中有物其形如廬乃遣使者令視還來之曰窟也因喚園雞稻置大山主問之曰有其野中者何窟矣啓之曰冰室也皇子曰其藏如何亦矣用焉曰堀土丈餘以草蓋其上敦敷茅荻取冰以置其上既經復月而不泮其由之當熱月漬水酒以用也皇子則將來其冰獻于御所天皇飲之自是以後每當季冬必藏冰至春分始散冰也云○延干式宮内省式云凡藏冰之處收冰多少及冰厚薄每處其錄元日群臣未喚之前省輔已上將本司入奏并進冰樣○同主水司式曰冰池風神九所祭山城國所江家次第曰冰山城國河内國所近江國所丹波國所○江國龜華丹波國神吉德國大和國都分河内國更占近江國龜華丹波國神吉○又曰冰樣累葺置於朝餉高欄○同抄云宮内省冰樣

△腹之奏

○肥後國風土記云玉名郡長渚濱昔者大足彥天皇誅球磨曾還駕之時泊御船於濱日本紀七景行天皇十二年秋七月熊襲御船左右游魚反之不朝貢八月乙未同丁酉幸筑紫多之掉人吉備國朝勝見以鈎釣之多有所獲即獻天皇勅曰所獻之魚此為何魚朝勝奏未解其名正似鱒魚耳歷御覽曰俗口多物即謂介倍佐介今所獻魚甚此多者

奏主水司奏之此司属宮内省冰樣者冰室厚薄寸法以瓦石為其樣奏之○今日本紀云延干式宮内省式云凡藏冰之處收冰多少及冰厚薄每處其錄元日群臣未喚之前省輔已上將本司入奏并進冰樣○同主水司式曰冰池風神九所祭山城國所江家次第曰冰山城國河内國所近江國所丹波國所○江國龜華丹波國神吉德國大和國都分河内國更占近江國龜華丹波國神吉○又曰冰樣累葺置於朝餉高欄○同抄云宮内省冰樣

可謂介倍奠今謂介倍奠其縁也○江次第曰腹赤若違
 期不參時七日奏○之根源曰腹赤の勢をて鳥を執り
 ちて也昔、雅て常命りて供りてや腹赤の食糧を喰りて
 とる九後して喰り累行を皇祖宗の世に海人をして釣て
 其後百有五年の時天平十の年正月十四日大宰府より是を
 送りて毎此常命りて是を重しと也腹赤の鳥は事
 手中にあり

△國柶奏

○日本紀埴應神天皇十九年冬十
 月戊戌朔幸吉野宮時國樺人來朝之因以醴酒獻于天
 皇而歌之曰伽辭能輔珥豫區周塢菟區利豫區周珥伽
 綿蘆淤朋淤枳宇摩羅珥枳虛之茂知塢勢磨呂俄智歌
 之既訖則打口以仰嘆今國樺獻土毛之日歌訖即擊口
 仰嘆蓋上古之遺則也夫國樺者其為入甚淳朴也每取
 山果食亦煮蝦蟆為上味名曰毛添其土自京東南之闕

山而居干吉野河上峯峻谷深道路狹嶮故雖不遠於京
 本希朝來然自此之後屢參赴以獻土毛其土毛者栗菌
 年魚之類焉○延キ式宮内曰凡諸節會吉野國柶御
 勢奏歌曲每節以十七人為定國柶十二人笛工五人但
 郡○江次第曰國柶歌笛於承明門外奏之○日本紀
 曰神武天皇五十甲戌午春至吉野投盤谷而出者天皇
 問之曰汝何人對曰臣是磐排別之子此則吉野國樺部
 始祖也○之根源曰今の國柶の奏を歌を傳ひ笛を吹くは吉野
 了ののりゆふのりゆふと云ふ○埃囊抄云國柶國樂も謂事傳りし
 ち極きて法國より小竈と稱して極きて盜賊あり強盜あり道行稀
 ぬ通して定事して衣袋財宝と稱し也竈といふは土極と云ふ
 の由極つけたりし 和國柶の歌笛法書を考ふ元日本紀七日の昔余
 又踏前昔余不歸ふとも源氏門の外を參りて見たり根赤心下
 但姑として云ふは早々許用せり吉野の由極川は昔より

西行は市り者土毛の栗菌鮎を... 郡内と信の...
只難て多の多好... 鮎と西極...
移りたる... 今世...
と... 程...
末... 十津川...
... 万代...
... 諸卿...

○ 柗原家年中行事記曰元日節會次第 諸卿着伏座
職事仰内辨内辨着端坐次召官人音令敷軾直沓次以
官人召大外記々々々々來着軾揖次内并問諸司具否諸
候哉諸司奏候哉固栖酒正 又仰之外任奏候哉外記申
候哉外記每度申候之由 又仰之外任奏候哉外記申
候之由内并仰云持参礼外記持参外任奏管内并披見
了目外記々々退入次内并以官人召職事職事來着軾
次内并奏外任奏管退入次職事奏聞侍奏次奏聞了出
陣返下次内并披見之時職事仰々詞内并兼仰微唯職

事退入次内并令官人召外記外記参軾内并下外任奏
仰々詞其儀如外記称唯退入次内并諸卿仰可出外并
之由居尚諸卿外并公卿各起座次内并於陣後着靴押
笏紙此間外并公卿各着幄之元子床子等次天皇御南
殿此間左取右近御倚子胡床称警蹕起次内并着宣陽殿元子次内侍臨
西欄召之次内并起元子磬折次内并謝座昇殿着座次
内并顧座下仰云閑門仕礼大舍人閑門以南南門為次闌
司二人分居次内并闌司罷寄加留次内并召舍人音次
少納言参入就版座此間外并云卿起次内并曰大夫達召
音少納言称唯出中門召之次外并公卿入中門立標下
陣立之由次内并宣敷尹音次公卿謝座謝酒昇殿着座
次陪膳采女撤御臺盤靶次内膳用供御膳自南階次供
腋御膳自東階次賜臣下餽飢内并下次内并候天氣次

御箸鳴臣下應之次供炮羹次供御飯次供進物所御菜
 次供御厨子所御菜次臣下飯汁餼次內并候天氣次
 御箸鳴臣下應之次供三節御酒臣賜次供一獻次臣下
 賜一獻內并仰參次供二獻次賜臣下次御酒勅使內
 音調取元日雙調越次供二獻次賜臣下次御酒勅使內
 并起座向御所方奏之次召參仰之廊取文於軒次
 供三獻次賜臣下次立樂代衣冠胡飲非定儀致子次內
 并下殿着陣見宣命見參次內并昇殿就內侍奏之入御
 於陣招職次職事取之經弓場殿上等就臺盤所妻戶付
 內侍奏之或內并就弓場之時職事出向取之奏次奏了
 飯出授內并退入次內并懷中宣命見參而昇殿着座次
 內并召參議賜宣命次內并召下臈參給見參祿法次
 內并次下下殿異位重次宣命使下殿就版次宣制一段
 再群臣又一段群次宣命使復座次群臣復座直向祿所

次拔七次內并以下々殿向祿所門南賜祿居一并而退
 出當時於月華門天皇還御御期不定○栗賦曰元日節
 會下行米內侍所最花石獻局調進之橋髮上得選石閣
 司石女孀二石主殿司石采女各一二石三大外記石造酒正
 一石官務石少外記石少史石少內記石出納二石人內豎二
 二石外記史生六升六合斗九官掌六升六合斗右官掌二以上外
 記官召使二石陣官人二石中務省三升三合斗大藏省五石斗
 木工寮升三斗三合三裝束使史生五升二斗二掃部寮二升二斗二御藏小舍
 人二四石主殿寮二石南座六升六合斗大舍人三升三合斗戶屋主六升六合斗修
 衛士升三斗合三外記官使部六升六合斗四府鉞請取役六升六合斗六修
 六升合斗鉞立官人三升三斗三合三內藏寮官人六升六合斗戶屋主六升六合斗修
 理職六升六合斗外記仕人三升三斗三合三內藏寮官人六升六合斗戶屋主六升六合斗修
 調進方晴御膳十石膳司腋御膳四石厨子所預饗膳職大膳
 六斗六合石松明五斗殿寮庭燎內右之幔六斗人火櫃生炭二斗人

節小極上。有細尖葉々間結小口子中空撚漬之有音出
冰初正青乾則黑色西南海多有之冬取乾之以藁釋一
握計折卷束之豫作米俵形名穗俵

△昆布

○本草曰昆布味鹹寒無毒生東海
○陶隱居本草云黃黑色柔細可食○順和名曰比呂未
一名衣比須女○毛吹菜曰松前昆布○和名佐西多丸
東山海の産と云ふは信正月同也るるその氣より若乾物と
雅也畢唯可後方と初るるもや
○良安曰昆布生
東海蝦夷松前及奥州海底附生於石蝦夷嶋有号嶋田
之地凡三十余里海中寸地亦無不有之共大者一株而
成林葉長二三丈謂之長昆布大抵幅四五寸長二三尺
海人用鎌刈取之挾腰乃滿於身則使繩挽浮却凡蝦夷
松前之産黃赤色而味甚美為家上津輕之産厚而味不

美但焙食或為油熬即佳也南部産稍黑而味亦劣矣並
傳送之若挾同列小濱市人能調製之以送四方其製法
以為家秘今京師亦能之故京若挾共得名專為嘉祝之
物和名似嘉字訓故乎昆布黃汁甚甜用可比於鱈黃汁
凡得山椒即味愈美用銅鍋煮昆布成青綠色家美又製
白昆布襖石

△野老

○順和名曰薺霍島食經曰味苦小
其無毒○和名土古呂俗用菟字漢語抄用野老二字今
案所出並未詳○蘓頌口經曰草薺根黃白色多節三指
許大春秋采根今成德軍所産者根亦如山薯而體硬其
苗引蔓○毛吹菜曰武藏野老云○是亦の玩子根也と云ふ
中絶漢語抄に野老と云ふは今昆布と名付る野老の産り
いなり正月二月ある野老の根厚くは若くは薄くは多し
拾遺

拾遺

是亦の玩子根也と云ふは今昆布と名付る野老の産り

小町のよと云々俗名と云々及婚嫁に用ひる事少く亦所謂青真赤也

○梅干しの酒の糸通し和作の糸原梅干しと稱せ給ふ事と云々良

安日鮠鮠共狀似鯛而口長眼大而赤軟鱗易脫蒼碧色

肉白脆脂多有細刺炙食或作鮠藏糟亦佳○數子鮠之

子也割腹出鮠乾之黃白色為上陳久者色臘月歲始及

婚家以為規祝之者取多子之義矣温暑至則出鮠臭氣

不堪食凡用時浸水四五日換水能洗淨沙垢軟熟或赤

許入則速軟和鹽搯合浸醬油食味脆甘美未知其法者炙不

柔煮之倍硬浸醋苦澀無奈之何○大なるものも亦いさや

又いさや俗稱て仁志半といふ事と給ふ事として當りぬ二親の氣なりといふ

○大なるものいさや半亭ハ半亭ハ半亭ハ中亭なりといふ

去と用て糖原小梅梓コバヤリを經り搗て之を菜板の上を梅を押しひきて麻粉

和粉サシマユと和て酒之食を小脆くす香氣を海里ウミとして佳し又これ半亭といふ

酒といひを煮る白大豆と塩を和りて押しひきて酒のいさや二種毎家之十日

雜考の熊加ふる乃菜と云

○俵海鼠

○舊事本紀六曰天孫降爰送後田

彦神而還到乃悉追聚鱗廣物鱒挾物以問言汝天神御

子仕奉耶之時餘諸魚皆仕奉白之中海鼠不白天鈿賣

命謂海鼠云此口不谷之口而以細小刀折其口故於今

海鼠口折是也○時珍食物本草曰海參○五雜俎曰海

男子○順和名曰崔禹錫食經云海鼠和名似蛭而大者

也○和俵海鼠と稱する海鼠と云々鰐海鼠和名對して也冬月當其れ和名の物

也和名海鼠と稱する事と云々海鼠と云々海鼠と云々海鼠と云々海鼠と云々

名あり奇思食ひ其の形異根し似り故海鼠とも云々和名海鼠

小と云々

○大なるものいさや半亭ハ半亭ハ半亭ハ中亭なりといふ

傳りて去後くも云々説小雅宮碑在集の自注云云云云云云云云云云云云

青なる故海鼠といふ事ありといふ也又云説二種者之類海鼠等飽の二種あり

○祇園前掛神事 元朝宣時

園社在山城國愛宕郡八坂御所祭之神三座牛頭天皇

神代卷云次生素彥鳥尊蓋蓋內傳云北天竺吉祥天皇

号牛頭天皇頭戴犢角猶如夜叉形類人回云八王子東神代卷云天照大神乃

索取素彥鳥尊十握劍打拍所生神凡三女矣改而素彥

鳥乞取天照大神髻髮及腕所纏八坂瓊之五百箇御統

所生神凡五男矣蓋蓋日八王子者曆少將井西神代卷

云出雲國鍛之川上有一老公与老婆中間置一少女撫

而哭之素彥鳥尊問曰汝等誰也何為哭之如此耶對曰

吾是國神号脚撫乳我妻号手摩乳此童女是吾兒也号

奇稻田姬所以哭者往時吾兒有八箇少女每年為八岐

大地所吞今此少女且臨被吞無由脫免故以哀傷尊勅

曰若然者汝當以女奉吾耶對曰隨勅奉矣故尊立化奇

稻田姬為湯津瓜櫛而挿於御髻乃使脚摩乳手摩乳釀

○神社啓蒙曰祇

真次給諸卿祿次尊者引出物云○又曰讓鷹飼錦褶子

紫纈狩衣 白布袴 壺脛巾 淺履 熊行膝 餅

囊 烏頭太刀 紅袷 左手居鷹 右手執付雉枝

犬飼帽子 紺布狩衣 紺草袴 貫イサキ 左手引犬 右

手取白木枝○ついで東日大臣の大食食らるる也と信じておるよ

者然り○自御所の云大臣の大食かゝる所と信じて好ましく

あゝ承り承せし時ハ女院の御所をも信じて好ましく

と云好まらり○按小上純を承りお月ハ御所の大臣の或るは

御所と信じて好まらるる御所の御所ハ先女御と奉り次ハ平御と奉る御

所ハ信じて好まらるる御所の御所ハ御所と奉る御所

後撰大宮の御所御所ハ御所と奉る御所

○いふ御所ハ御所と奉る御所

の御所ハ御所と奉る御所

と云好まらるる御所と奉る御所

いふ御所ハ御所と奉る御所
御所の御所と奉る御所
御所の御所と奉る御所
御所の御所と奉る御所
御所の御所と奉る御所
御所の御所と奉る御所
御所の御所と奉る御所
御所の御所と奉る御所
御所の御所と奉る御所
御所の御所と奉る御所

○按家初礼二日 當時年中行事記曰二日 或三

除御徳日有小朝拜時不参之拱家参内自長橋御車寄

入於常御殿有御礼御献出ツル餅

○兩中程お籠子二日 系於東御所お籠子の御所

御所お籠子の御所

御所お籠子の御所

御所お籠子の御所

○天狗酒壺二日 雍州府志曰愛宕寺在建仁

寺之南隣本尊観音也千観内供奉之開基而与金竜寺

通外門二王像佛工運慶港慶之所作也始在車屋町二

條北於今其処謂二王門町未詳為何寺之二王門中世
 其処人寄附斯寺建門而安之本坊謂念仏寺每年正月
 二日夜門前大神人聚方丈作酒宴是謂天狗酒盛其後
 赴本堂牛王加持之場鳴大鼓吹法螺其體喧雜故稱天
 狗酒盛者乎○古老傳云白三柄河原と云ふ川に於て神人あり
 傳りて其來を定むるの儀に會の儀大原小原を河原とて後万葉集を
 唱やと云ふ事をお傳へてありてその方より人をして白三柄
 くと唱て入又本堂より鳴大鼓は是は響く一城の勢に上は
 るり又いふ人老んあはば夜の万葉集い東の方北背信し又西の方背を
 りて具りりふ今逢ふ東の方背くは揚りて一衣の音高といひてあつ果
 りまの方も人まわけて背きの神ありは夜のは舞は揚りて神さす是の
 あつてそ身の勝ふ神移りといふの事と云ては神の杖とて神の杖の
 例のこゝ一衣の歌と云て入りては杖大是去其の腕と云神の杖と云て
 見紙合と云ふ事と云ふ小神と云ふ杖奉れ何今逢つる今逢ふ今逢

あつあつと揚りてそのまゝのまの杖の言は神の杖と云ふ者の唱を
 して神の杖と云ふて小神と指奉れは又神の杖と云ふ言は神の杖と云ふ
 や平段といひては神の杖と云ふ神人如儀と云ふ杖と云ふ杖と云ふ
 杖と云ふ杖の言をよみて杖と云ふ杖と云ふ杖と云ふ杖と云ふ杖
 やつらんとて杖と云ふ杖と云ふ杖と云ふ杖と云ふ杖と云ふ杖と云ふ杖
 杖と云ふ杖と云ふ杖と云ふ杖と云ふ杖と云ふ杖と云ふ杖と云ふ杖
 と云ふ杖と云ふ杖と云ふ杖と云ふ杖と云ふ杖と云ふ杖と云ふ杖と云ふ杖

○庭竈

○説文曰庭宮中也从广廷声○又

曰竈炊竈也从宀竈声○
 昔は庭宮と云ふ當世法言一田今は正月は庭の内庭宮の竈のわ小庭宮
 圍爐裏といふ構(新編)庭宮の元は法言と云ふ庭宮のわと圍爐裏
 の男女出入のまゝと云ふ事其の火を傳て庭宮の庭宮といふと云ふ
 るは庭宮と庭竈と稱するも庭宮といふも庭宮といふも庭宮といふも

也○釈名曰艇一二人所乘也○順和名曰平夫祢○唐韻

曰舩舩小漁舟也○和名曰豆○舩名曰舩舩小而深者曰

舩和名曰太加世○舩俗用高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

也○釈名曰艇一二人所乘也○順和名曰平夫祢○唐韻

曰舩舩小漁舟也○和名曰豆○舩名曰舩舩小而深者曰

舩和名曰太加世○舩俗用高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

舩和名曰高瀬舟○又曰舩舩薄而長者曰舩○和名曰比

○馬系初 飛馬始

○時珍本草曰按許慎云馬武也

其字象頭髦尾足之形牡曰騶暗曰見牝曰騶曰騶曰草

去勢曰騶一歲曰馬潜二歲曰駒三歲曰騶四歲曰騶

梵書謂馬為阿濕婆馬應月故十二月而生其年以齒別

之在畜屬火○周礼曰凡馬八尺以上為龍七尺以上為

駃六尺為馬○相馬經曰凡相馬之法先除三羸五駃乃

相其餘大頭小頭一羸弱脊大腹二羸小頭大蹄三羸其

五駃者大頭緩耳一駃長頸不折二駃短上長下三駃大

絡短脇四駃淺體薄髀五駃○家語曰顏回望吳門馬見

一足練孔子曰馬也然馬之光景一足長耳故後人号为

練馬也然馬之光景一足長耳故後人号为練馬也

練馬也然馬之光景一足長耳故後人号为練馬也

少之流せり而之減きん存下 冊中意と存常も解し字のまゝに
子と字をよみ解し神のまゝに存真と認つては神と存るはまゝに
存るはまゝに存るはまゝに存るはまゝに存るはまゝに

○撰津国風土記云美奴賣松原今称美女
者神名其神本居能勢郡美奴賣山者息長带比賣天皇
幸下筑紫国時集諸神祇於川边郡内神前松原以求禮
福于時此神亦同來集曰吾護佑仍諭之曰吾取往之山
有須義乃木名直代採為吾造船則乘此船而可行幸當
有幸福天皇乃隨神教遣命作船此神船遂征新羅還來
之時祠祭此神於斯浦并留船以献又名此地曰美奴賣
又云敏馬浦○撰の位在社の例は私に於ては小社は是れ神祇の
養ぬるの神と存るはまゝに存るはまゝに存るはまゝに

一足故也○風俗通曰馬夜行目明照前四丈故曰一足
 順和名曰馬和名駿和名單和名馬米万駿岐和名土駕於曾岐
 驛波称○和名解曰馬音馬之助也○陰陽曆曰馬宗
 初又飛馬始也○是とて二事と云ふべし
 唐門の祝言系物なりかき又つ祝いの馬の梵語と未考也大目下小結安小

○湯屋始
 令廣義曰元日服蒼木湯或用沐浴或割焚之却病辟邪
 不病瘡○和信の歳始は沐浴と湯屋始と稱する也

○水祝
 和信の去冬新に娶りし男小歳首の水を
 新中へ水と浴するあり是と水祝の水掛と稱せし昔より
 承祿院宣の河阿波之宮に水掛する婦女と家家の親戚
 小書ありし時け敷きと云ふ和信と云ふ事血氣の盛るる

和信の世に世裁きと云ふ事と指する或は海國傳よりあるは信てお
 山の傍て好むと云ふ事ある世風は信て水祝の初より今に至る
 とも相ふ松竹の節をさし書きて一冊と新に取らり用ひ侍りおまは
 是と云ひて謝礼のの指信は酒飯と云ふ水祝振舞と稱するありし

○福杖
 養性月覽曰昔齋人歐明者乘船過
 晴草湖忽風起過晦暝漂泊漸逢青草湖君止干彼家湖
 君語曰君所願富貴金石等吾与之歐明未知答所傍有
 一人告歐明曰君唯求如願余物可勝歐明依其人語望
 乃喚如願即是一少婢湖君語明曰君領取至家要物但
 就如願所願皆可得明飯家數年而遂大富後至歲旦如
 願起晏明怒而鞭如願潛糞掃中忽没失所在後明家大
 貧○この世に此祝より小歳首今報と云ふ事御若事家僕
 の此義を承は兼首も和信の杖とあり是と福杖と稱せし昔より

○ 裏白連歌 四日

日有裏白連歌凡連歌懷紙四枚也中古執筆誤脫片
不記之自是為流例存片白紙又別添一枚為五枚依号
裏白連歌

○ 院御幸 四日

日除御徳日
十五日迄内

○ 親王方使 四日

本宛被進之御使釜殿勤之

○ 同記曰親王方江御未廣一
釜殿御使者中頃
衰微之例也

○ 牛飼童子御礼 四日

清涼殿東庭内侍自内掛御簾兩人拜之退去

○ 當時年中行事曰四日 或五

○ 三物連歌 系 雜 諧

三物と稱し愛句脇中三物と作るも三人と編むも其意味は偏の
口傳傳るる人々連歌はたわひに詠巴冒比等仍の本目より中納言
より中納言付侍ありてや始りて詠諧より真由老人の編むより始りて
單句より詠承の字道親て梅りては傳るる三圖流より是と作し附と
是歌詠傳の類はけ及の人も知らずるもねと存記にたれは最初は此記
天正十七年 丑元日

○ 是又單首の連歌 雜 諧

春のやうきや 深家りとの夏 詠色
ふとせしめぬ 雪の初戸出 昌比
日の影よみ 祢の霞の晴初 昌仍

曰

長岡よりよきやをきまのりとの夏 昌比
霞よめらるる 雪の初戸出 昌仍
雪の羽風は梅のつらり 昌比

よ根書てこむと讀之順和名曰温菘乃は事と侍りしむと侍るを
さへいひ事せと上皇作しむ侍る事いふ米七疋の物之蕭とつて芥
沙敷すしる佛のなること正月七日七疋の菜羹と食せしむる氣
邪氣とのまじ術は侍りしむる

古今 仁和寺門前侍りしむる時人よの菜羹は侍りしむる

あつたあまの孫よ出てあまあつたあまの孫よ出てあまの孫よ出て

○子日提

○扶桑略記曰宇多天皇寛平八年

閏正月六日有子日宴行北野雲林院○菅家文章曰扈
從雲林院不勝感歎聊叙所觀序云予亦嘗聞干故老曰
上陽子日遊厭老○又曰倚松樹以摩腰習風霜之難犯
也和菜羹而啜口期氣味之克調○拾芥抄曰正月二日
登岳何耶傳云正月子日登岳遠望四方得陰陽靜氣除
煩惱之術也十節記私云錦繡万花谷曰○公事根源曰
是日一人好まわて子日とて松とて朱權院園融院之樂院

かとの内侍もいふ侍りしむるや中も系融院の子日とせしむる侍りしむる
元正二月三日の也詔の程は奉也つは系融院とて上野の御馬小使
とれ侍りしむる侍りしむる侍りしむる侍りしむる侍りしむる侍りしむる
小使とて侍りしむる侍りしむる侍りしむる侍りしむる侍りしむる侍りしむる
和帝とて侍りしむる侍りしむる侍りしむる侍りしむる侍りしむる侍りしむる
人とも侍りしむる侍りしむる侍りしむる侍りしむる侍りしむる侍りしむる

万葉集卷第廿九曰天平宝字二年春正月三日召侍從豎
子王臣等令侍於内裏之東屋垣下即賜玉帚肆宴于時
内相藤原朝臣奉勅宣諸王卿等隨堪任意作歌并賦
詩仍応詔旨陳心緒作歌賦詩一首未得諸人之賦
藏政不堪奏之也右中弁大伴宿称家持始春之初子乃今日之
玉帚手介取加良介勅具玉乃緒○八平侍曰さきより侍りしむる侍りしむる
乃ち侍りしむる侍りしむる侍りしむる侍りしむる侍りしむる侍りしむる
のねと具して帚は侍りしむる侍りしむる侍りしむる侍りしむる侍りしむる侍りしむる

様玉

くはふんとの藤屋の奥ともはのりのおきやが

意法

△ 牒緘 初寅日

○ 和信高野の堂一蔵中の日記と書き簡と

上りあり程多し(陸奥大福の字と部とを相原法隆寺蔵書作大福より好ま

○ 縁起曰本宮推古天皇庚午聖徳太子彫刻に於て大和國唐郡富田

卿と他處と建て業師とておきとて造りて大五派法高野人今

張浪海に後ふみ富貴の力より宗良山系難波博の堂に縁ありふ

人として居て堂より集りて帳の上書と大福帳と号する大福の義よりり

文和と他處と火の災ありあり後文毫の流に系とを稱大福帳の義も

形作りと一世の任傍隠(を)と自派の群衆を厭ひて停止今に至る○

周礼司書注疏曰古者以簡束記事若對君則以笏記之

後代用簿々今手版也○良安按古云史籍今多用帳字

華倭共然則不可為誤矣紙數緘結每日記事故又名日

記右一件
丈石補

△ 女直衣囊 初寅日

○ 肘後方曰正月上寅日搗女青

末三角絳囊盛繫帳中大吉辟禳瘟疫○時珍本艸曰女

青地銜根也○蘇頌曰地銜生土石或下湿地蜀中人家

亦種之辟蛇一莖五葉或七葉有兩種八月採根○多識

篇曰今案喜良牟草

○卯杖 上卯日

大学寮献杖八十枚 ○江次第曰上古有出御南殿皇太子参上儀近代不行春宫被献卯杖进之南廊小板敷次大舍人进御杖六十束立夜御殿南户内面东西壁下次左右兵卫府进御杖立昼御座御帐西角次系所进卯杖次作物所进卯杖自去年十二月十八日彼所别当藏人始行事案二脚之上置小莹其上置洲滨其上作奇岩怪石嘉树芳草白砂绿水其中作御生气方兽形令合卯杖生气在离作马生气在坤作羊不作猿生气在兑作鸡生气在乾作猪不作犬生气在坎不作鼠寻养者方作马生气在艮作牛不作虎生气在震作兔生气在巽作竜不作蛇行事藏人以下昇之自仙华门昇上立昼御座广庇案等云 ○延丰式左兵卫府式云凡正月上卯督以下兵卫

已上各執御杖一束次第參入立定佐一人進奏其詞曰
 左右兵衛府申正月能上卯日能御杖仕奉氏進登久申
 給登久申勅曰置之醫師已上共稱唯獻畢以次退其御
 杖登久檟三束為一株木比三束比々良木三束年保呂三束
 黑木三束桃木三束梅木二束已上二株椿木六束為四株中
 宮東宮別檟一束為二株木比二束比々良木二束年保
 已一束黑木二束桃木三束梅木二束椿二束並各長五
 尺三寸云云○江次第裏書云仁壽二年正月諸衛獻祝杖
 逐精魁○漢官儀云正月卯日以桃枝作剛卯杖厭鬼○
 漢昏王莽傳云正月剛卯金刀之利注服虔曰剛卯以正
 月卯日作佩之長三寸廣一寸四方或用玉或用金或用
 桃著草帶佩之云云○漢書禮記注云桃者木之精也
 夫木多之氣也○漢書禮記注云桃者木之精也夫木
 多之氣也

△卯槌 曰日

○江次第云絲所進卯槌如絲所或者可居机

欽私云絲所在采
 女町北綫厥別所也其料絲卯槌御机組縫覆敷料十兩
 二分詔三河系結組料七兩二分紉波已上申請納殿藏
 人取之結付晝御帳懸角柱副立細木為柱槌未出五尺
 許可用挑木又四方可削近代丸失欽○以卯杖元日或ハ七日
以卯杖元日或ハ七日

卯杖元日或ハ七日
卯杖元日或ハ七日

○叙位 五日

○日本紀 推古天皇十一年冬十

二月戊辰朔壬申皇太子豐讀干天皇始行冠位大德師
 曰今位小德大仁位五小仁大禮位六小礼大信位七小信大義位
 小義大智位初小智并十二階並以當色絕縫之頂撮摠如
 囊而着綠焉唯元日著髻華○同十二年春正月戊戌朔
 始賜冠位於諸臣各有差成敗○江家次第曰叙位諸卿
 著左杖次着議所私云議所有日華門北掖勸盃并勸盃
 藏人傳召大臣召外記諸卿參上執管文件管入硯筆臺

歲利其人入夜神輿還幸翌子日以大竹數莖東西分列
村民牽之案日本紀神武天皇於此處討長髓彦長髓彦
遺屎於禪退走自茲此地謂禪屎今誤謂柞杜其柞惡鬼
者長髓彦而牽竹輪則表救長髓彦之首之微意乎

○春の宮

○曲禮曰青宮一曰春宮太子宮也

○又曰太子宮曰東宮正位疏德于少陽少陽者東方又
震為長子東屬震○楚辭曰春宮東方青帝舍也又太子
東宮亦謂之春宮也○神異經曰東方東明山有宮青石
為牆門有銀傍以青石彫鏤曰天地長男之宮○紹興元年
或曰春の宮東宮の也或曰青宮の也
○神皇正統記の宮とて言ふは難し其の宮と云ふは其の宮なり○
これ等の説太子の宮とて言ふは春宮とて言ふは其の宮なり又楚辭等
神異經の長帝とて言ふは造化の神皇と云説も同じ道正とて此

末 八咫の園より八咫の宮とて言ふは此の宮なり

